

わが散文詩

芥川龍之介

青空文庫

秋夜

火鉢に炭を継がうとしたら、炭がもう二つしかなかつた。炭取の底には炭の粉の中に、何か木の葉が乾反つてゐる。何処の山から来た木の葉か？——今日の夕刊に出てゐたのでは、木曾のおん岳の初雪も例年よりずっと早かつたらしい。

「お父さん、お休みなさい。」

古い朱塗の机の上には室生犀星の詩集が一冊、仮綴の頁を開いてゐる。「われ筆とることを憂しとなす」——これはこの詩人の歎きばかりではない。今夜もひとり茶を飲んでゐると、し

みじみと心に沁みるものはやはり同じ寂しさである。

「貞^{てい}や、もう表をしめておしまひなさい。」

この呉^ご須^すの吹きかけの湯のみは十年前^{まへ}に買ったものである。

「われ筆とることを憂しとなす」——さう云ふ歎きを知つたのは
爾^{じらい}来^{らい}何年の後^{のち}であらう。湯のみにはとうに罅^{ひび}が入つてゐる。茶も
亦^{また}すつかり冷^ひえてしまつた。

「奥様、湯たんぽを御入れになりますか？」

すると何時^{いつ}か火鉢の中から、薄い煙が立ち昇つてゐる。何かと
思つて火箸^{ひばし}にかけると、さつきの木の葉が煙るのであつた。何処^{どこ}
の山から来た木の葉か？——この勻^{にほひ}を嗅^かいだだけでも、壁^{かべ}を塞^{ふさ}い
だ書棚の向うに星月夜の山山が見えるやうである。

「そちらにお火はございますか？ わたしもおさきへ休ませて頂
ますが。」

椎しひの木

椎しひの木の姿は美しい。幹や枝はどんな線にも大きい底力を示
てゐる。その上枝をよろ鎧つた葉も鋼鉄のやうに光つてゐる。この葉
は露つゆしも霜も落すことは出来ない。たまたま北きた風かぜに煽あふられれば一
度に褐色の葉裏を見せる。さうして男らしい笑ひ声を挙げる。

しかし椎の木は野蛮やばんではない。葉の色にも枝ぶりにも何処どこか落
着いた所がある。伝統と教養とに培つちかはれた士人にも恥ぢないつ

ましきがある。榲かしの木はこのつつましさを知らない。唯冬との※せめ
ぎ合ひに荒荒しい力を誇るだけである。同時に又榲の木は優柔で
もない。小春日こはるびと戯たはむれる樟くすの木のそよぎは榲の木の知らない気軽
さであらう。榲の木はもつと憂鬱である。その代りもつと着実で
ある。

榲しひの木はこのつつましきの為に我我の親しみを呼ぶのであらう。
又この憂鬱な影の為に我我の浮薄ふはくを戒めるのであらう。「まづた
のむ榲の木もあり夏木立こだち」——芭蕉ばせをは二百余年前ぜんにも、榲の木の
氣質を知つてゐたのである。

榲の木の姿は美しい。殊に日の光の澄んだ空に葉照りはでの深い枝
を張りながら、静かに聳えてゐる姿は莊嚴に近い眺めである。雄を

雄をしい日本の古天才も皆この椎をの老おい木きのやうに、悠悠としかも
 厳肅にそそり立つてゐたのに違ひない。その太い幹や枝には風雨
 の痕あとを残した儘。……

なほ最後につけ加へたいのは、我々の租先は杉の木のやうに椎
 の木をも神あがと崇めたことである。

虫干

この水みづ浅あさぎ黄わうの帷かたびら子はわたしの祖父おほぢの着た物である。祖父は
 お城のお奥坊主おくぼうずであつた。わたしは祖父を覚えてゐない。しか
 しその命めい日にち毎ごとに酒そなを供へる画ぐわ像ざうを見れば、黒羽くろは二重ふたへの紋もん服ふく

を着た、何処か一徹らしい老人である。祖父は俳諧を好んでゐたらしい。現に古い手控への中にはこんな句も幾つか書きとめてある。

「脇差しも老には重き涼みかな」

（おや。何か映つてゐる！ うつすり日のさした西窓の障子に

）

その小紋の女羽織はわたしの母が着た物である。母もとうに

破してしまつた。が、わたしは母と一しよに汽車に乗つた事を覚

えてゐる。その時の羽織はこの小紋か、それともあの縞の御召し

か？ ——兎に角母は窓を後ろにきちりと膝を重ねた儘、小さい

煙管を啣へてゐた。時々わたしの顔を見ては、何も云はずにほほ

笑みながら。

(何かと思へば竹の枝か、今年ことし生えた竹の枝か。)

この白しろちや茶はかたの博多の帯は幼いわたしが締めた物である。わたしは脾弱ひよわい子供だった。同時に又早熟な子供だった。わたしの記憶には色の黒い童女の顔が浮んで来る。なぜその童女を恋ふやうになつたか？ 現在のわたしの眼から見れば、寧ろむしみにく醜いその童女を。さう云ふ疑問に答へられるものはこの一筋の帯だけであらう。わたしは唯樟しやうなう脳にほひに似た思ひ出の勻にほひを知るばかりである。(竹の枝は吹かれてゐる。娑婆界しやばかいの風に吹かれてゐる。)

線香

わたしは偶然垂れ布を掲げた。……

妙に薄曇つた六月の或朝。

八大胡同の妓院の或部屋。

垂れ布を掲げた部屋の中には大きい黒檀の円卓に、美しい

支那の少女が一人、白衣の両肘をもたせてゐた。

わたしは無駄を恥ぢながら、もと通り垂れ布を下さうとした。

が、ふと妙に思つた事には、少女は黙然と坐つたなり、頭の位

置きへも変へようとしな。いや、わたしの存在にも全然氣のつ

かぬ容子である。

わたしは少女に目を注いだ。すると少女は意外にも幽かに睡を

とぎしてゐる。年は十五か十六であらう。顔はうつすり白粉おしろいを刷はいた、眉まゆの長い瓜実顔うりざねがほである。髪は水色の紐むすに結んだ、日本の少女と同じ下げ髪、着てゐる白衣びやくえは流行を追つた、仏蘭西の絹か何からしい。その又柔かな白衣の胸には金剛石ダイヤモンドのブロオチが一つ、水水しい光を放つてゐる。

少女は明めいを失つたのであらうか？ いや、少女の鼻のさきには、小さい銅の蓮華れんげの香炉かうろに線香が一本煙つてゐる。その一本の線香の細さ、立ち昇る煙のたよたよしさ、——少女は勿論もちろん目を閉ぢたなり、線香の薰かほりを嗅かいでゐるのである。

わたしは足音を盗みながら、円卓テエブルの前へ歩み寄つた。少女はそれでも身ぢろぎをしない。大きい黒檀テエブルの円卓テエブルは丁度ちやうど澄み渡

つた水のやうに、ひっそりと少女を映してゐる。顔、白衣、金
イアモンド
 剛石のブロオチ——何一つ動いてゐるものはない。その中に唯
 線香だけは一点の火をともした先に、ちらちらと煙を動かしてゐ
 る。

少女はこの一炷いつしゆの香かうに清閑せいかんを愛してゐるのであらうか？

いや、更に氣をつけて見ると、少女の顔に現れてゐるのはさう云
 ふ落着いた感情ではない。鼻翼びよくは絶えず震えてゐる。脣くちびるも時時ひ
 き攣つるらしい。その上ほのかに静脈じやうみやくの浮いた、華奢きやしやな顚こめか
み顚みのあたりには薄い汗さへも光つてゐる。……

わたしは咄嗟とつさに発見した。この顔みなぎに漲る感情の何かを！

妙に薄曇つた六月の或朝。

八大胡同の妓院の或部屋。

わたしはその後、幸か不幸か、この美しい少女の顔程、病的な性慾に悩まされた、いたいたしい顔に遇つたことはない。

日本の聖母

山田右衛門作は天草の海べに聖母受胎の油画を作つた。
するとその夜聖母「まりや」は夢の階段を踏みながら、彼の枕もとへ下つて来た。

「右衛門作！ これは誰の姿ぢや？」

「まりや」は画の前に立ち止まると、不服さうに彼を振り返つた。

「あなた様のお姿でございます。」

「わたしの姿！　これがわたしに似てゐるであらうか、この顔の黄色い娘が？」

「それは似て居らぬ筈でございます。――」

右衝門作はゑもさく叮嚀ていねいに話しつづけた。

「わたしはこの国の娘のやうに、あなた様のお姿を描かき上げました。しかもこれは御覽の通り、田植たうゑの装しやうぞく束たもとでございます。けれども円ゑん光くわうがございますから、世の常の女にょにん人とは思はれま
すまい。」

「後ろうしに見えるのは雨あま上あがりの水田すゐでん、水田の向うは松山でござ
います。どうか松山の空にかかつた、かすかな虹にじも御覽下さい。」

その下には聖靈を現す為に、珠数懸け鳩じゆずか はとが一羽飛んで居ります。
 「勿論かやうなお姿にしたのは御意ぎよいに入らぬことでございませう。
 しかしわたしは御承知の通り、日本の画師ゑしでございませう。日本の
 画師はあなた様さへ、日本人にする外ほかはございませう。何とさ
 やうではございせんか？」

「まりや」はやつと得とくしん心したやうに、天上の微笑びせうを輝かせた。
 それから又星月夜の空へしづしづとひとり昇つて行つた。……

玄関

わたしは夜寒よさむの裏通りに、あかあかと障子へ火の映うつつた、或家

の玄関を知つてゐる。玄関を、——が、その蝦夷松えぞまつの格子戸かうしどの中へは、一いつべん遍も足を入れたことはない。まして障子ふさに塞ふさがれた向うは全然未知の世界である。

しかしわたしは知つてゐる。その玄関の奥の芝居を。涙さへ催させる人生の喜劇を。

去年の夏、其処そこにあつた老人の下駄げたは何処どこへ行つたか？

あの古い女の下駄とあの小さい女の子の下駄と——あれは何時いつも老人の下駄と履脱くつぬぎの石にあつたものである。

しかし去年の秋の末には、もうあの靴や薩摩下駄さつまが何処どこからか其処そこへはひつて来た。いや、履はき物ばかりではない。幾度もわたしを不快にした、あの一本の細巻きの洋傘かうもり！ わたしは今でも

覚えてゐる。あの小さい女の子の下駄には、それだけ又同情も深かつたことを。

最後にあの乳母車うばぐるま！ あれはつい四五日前まへから、格子戸かうしどの中にあるやうになつた。見給へ、男女の履はき物の間におしやぶりも一つ落ちてゐるのを。

わたしは夜寒の裏通りに、あかあかと障子へ火の映うつつた、或家の玄関を知つてゐる。丁度ちやうどまだ読まない本の目次もくじだけぎつと知つてゐるやうに。

(大正十一年十二月)

青空文庫情報

底本：「筑摩全集類聚 芥川龍之介全集第四卷」筑摩書房

1971（昭和46）年6月5日初版第1刷発行

1979（昭和54）年4月10日初版第11刷発行

入力：土屋隆

校正：松永正敏

2007年6月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

わが散文詩

芥川龍之介

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>